



# 世界紀行文学全集

8

ドイツ・オーストリア・オランダ・ベルギー

|| 志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第八卷

ドイツ・オーストリア・オランダ・ベルギー

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社はるぶ出版

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五四七〇三一(代)

代表 中森蒔人

総発売元

株式会社はるぶ

製作

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五六六二二一(代)  
東京連合印刷株式会社

目

次

ドイツ

大久保 泰  
武者小路実篤  
斎藤 清衛  
山口 青邨  
野上 弥生子  
児島 喜久雄  
笠 信 太郎  
堂 本 印象  
手塚 富雄  
羽 仁 五 郎  
柳 田 謙十郎  
オーストリア  
杉 村 楚人冠  
与謝野 晶子  
兼 常 清 佐  
柳 田 國 男  
斎 藤 茂 吉

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 眠るヴィナス……………         | 三   |
| ベルリンにて……………         | 六   |
| シプレイ河行楽……………        | 二〇  |
| ハルツの旅……………          | 二二  |
| フランクフルト・アム・マイン…………… | 三七  |
| ンヒェン……………           | 三三  |
| ハムブルクの思い出……………      | 四一  |
| ベルンカステルにて……………      | 四九  |
| ボンからゼネヴァへ……………      | 五一  |
| ボンからのたより……………       | 五四  |
| ドイツ……………            | 六五  |
| 東独を見る……………          | 九五  |
| ウインナの旅行券裏書……………     | 一〇一 |
| 維納……………             | 一〇三 |
| 音楽の都ウィーン……………       | 一〇五 |
| オーストリアにて……………       | 一四  |
| ドナウ……………            | 二五  |
| 玉菜ぐるま……………          | 二六  |
| 紙幣鶴……………            | 二六  |
| 花を嗅ぐ……………           | 二六  |
| 養老院……………            | 二八  |
| ピエテル・ブリューゲル……………    | 二八  |
| 接吻……………             | 二八  |

林 久男  
 松村 武雄  
 安倍 能成  
 辰野 隆  
 和田 三造  
 飯塚 浩二  
 山田 珠樹  
 横光 利一  
 武者小路実篤  
 野上 弥生子  
 羽仁 五郎  
 大岡 昇平  
 吉田 秀和  
 園部 三郎  
 属 啓成

……三〇 蟬子……………三四 歌会……………三六 おどり……………三六 脱帽……………二七  
 ドナウ源流行……………三八 復活祭……………  
 ドナウの流と江河の壮美……………  
 ウィンの羅馬博物館……………  
 ヴィーンよりツューリヒへ……………  
 スウヴニール……………  
 ウィンの持つ滋味……………一五 コーヒと水の味……………一五 鳩のお正月……………  
 一五 メードリングのよき日本婦人……………一五 村の酒屋で新酒の振舞……………  
 一五 溪間の都、モツアルトの故郷へ……………  
 初秋のティロール……………  
 ザルツブルグの岩塩坑……………  
 ウィン……………  
 ウィン通信……………  
 サルツブルク……………一五 ヴィーン……………  
 ウィン市……………  
 ザルツブルクの小枝……………  
 モーツァルトの町……………一七 ウィーンのオペラ……………  
 二つの古いオペラ……………二二 トルコ料理店の交友……………二四 ウィンにいる……………  
 ハンガリア人……………二六 反ソ感情の根……………  
 ザルツブルグからインスブルック……………  
 ……二八

|        |                       |     |
|--------|-----------------------|-----|
| 谷川 徹三  | ウィーン通信……………           | 二四  |
| 湯川 秀樹  | ウィーンより……………           | 二九  |
| オランダ   |                       |     |
| 三宅 克己  | ヘーグへ……………三三           | 三三  |
| 志賀 重昂  | ミッドルブルグ・ヴェルの漁村……………   | 三三  |
| 与謝野 寛  | 和蘭の五日間……………           | 三三  |
| 晶子     | 和蘭陀へ着いた夜……………三四       | 三六  |
| 橋本 関雪  | 和蘭陀の二日……………           | 三六  |
| 安倍 能成  | 和蘭だより……………            | 三七  |
| 土岐 善麿  | オランダの旅……………           | 三八  |
| 幸田 成友  | 水郷風俗……………             | 三五  |
| 市河 三喜  | 和蘭夜話……………             | 三六  |
| 晴子     | オランダ……………             | 四八  |
| 高浜 虚子  | 和蘭通過、倫敦に着く……………       | 四五  |
| 野上 弥生子 | オランダの三日……………三五        | 三九  |
| 野上 豊一郎 | 道草……………               | 三九  |
| 山口 青邨  | レンブラントの国……………         | 二六  |
| 裕 伊之助  | ヘーグにて……………            | 二七〇 |
| 加藤 周一  | オランダ紀行……………           | 二七一 |
| 式場 隆三郎 | オランダの印象……………          | 二七五 |
|        | アムステルダム of 夕靄……………二七六 | 二七六 |
|        | ゴッホ探書……………二七六         | 二七六 |
|        | 国立クレア・ミ……………          | 二七五 |

ユラア美術館……………三九 スキャヴニンゲンの海辺……………二八〇 アムステルダムのゴッホ家の蒐集……………二八一 マドロオダムの豆都市……………二八二 雨のライデン……………二八三 働く脳病院……………二八三 ヌエネンの並木道……………二八三 モデルの女……………二八四

デルフト市のフェルメール……………二八五

郷愁……………二八九

中産階級の国・オランダ……………二九七

オランダの訪問……………三〇三

竹山 道雄……………三〇三

ベルギー……………三〇三

巖谷 小波……………三〇七

杉村 楚人冠……………三〇七

三宅 克己……………三〇七

与謝野 寛……………三〇七

小杉 放庵……………三〇七

徳富 蘆花……………三〇七

高浜 虚子……………三〇七

石井 柏亭……………三〇七

小泉 信三……………三〇七

白仏来日記……………三〇七

ウォータールー……………三〇九 ブラッセル……………三三二 ベルジューム一瞥……………三三三

白耳義へ出発……………三三四 和蘭より再度白耳義に帰る……………三七七

ブリュッセル……………三三九 アントワープ……………三三〇

ブルッセルにて……………三三三 出立間際……………三三三

白耳義から仏蘭西へ……………三三四 ブリュッセル……………三三五

し……………三三八

アントワープ行……………三三八

白京雜信……………三四四 ブリュクセルより……………三四八

ベルギー……………三五二

|       |                 |    |
|-------|-----------------|----|
| 齋藤 清衛 | 南ベルギーより首都へ…………… | 三五 |
| 加藤 周一 | 出発……………         | 三五 |
| 野田 又夫 | 言葉……………         | 三六 |
| 土方 定一 | エラスムスの家……………    | 三六 |
| 岡本 一平 | ブリュージュ……………     | 三六 |
|       | 画と文……………        | 三六 |
|       | 小便小僧……………       | 三六 |
|       | 戦の痕……………        | 三六 |
|       | ブラッセル市庁……………    | 三六 |
|       | 日本の鯉……………       | 三六 |
|       | ベルギーの田舎……………    | 三六 |

|               |    |
|---------------|----|
| 執筆者・出典一覧…………… | 三七 |
|---------------|----|

|     |                                           |        |
|-----|-------------------------------------------|--------|
| 地 図 | オーストリア、オランダ、ベルギー、ウィーン、アムステルダム、ブリュッセル…………… | 巻末（折込） |
|-----|-------------------------------------------|--------|

ドイツ・オーストリア  
オランダ・ベルギー



## 眠るヴィナス

大久保 泰

クリスマスには美術館は閉鎖されると聞いていたので、止むなく旅程を繰り上げ、雪のベルリンをたつたのは、十二月二十二日、十三時十二分。かれこれ二時間半ばかりで、矢張り雪のドレスデンに着いた。汽車のステイムが暑過ぎたせいか、外気は甚だ冷たい。

私はホテルにスーツケースを預けるなり、ゲメルデ画廊に出かけた。既に閉門時間だったので、むなしく、その足で、画廊の裏を流れているエルベ河の辺に立った。市街の舗道には、数日前降った雪は、それと思われぬ程いぎたなくこびりついているが、河畔には今のさつき降り積ったかのように目をさす白さである。水嵩の多い河面には、氷の破片が後から後から押し合い、へし合い、河幅一杯に流れている。如何にも大陸的な物珍らしい風景だったので、飽かず眺めていた。河の向う岸には雪に蔽われたいくつもの教会から、エメラルド・グリーンンの尖塔

のみが抜きん出て、白い雪に対照されてすがすがしい美しさだ。いつも見るゴシック建築の、高く聳え立ち無限に向って憧憬渴望しているような痛ましい悲劇的な相貌は感じられない。いな寧ろ、静かに氷を押し流しているエルベ河の雄大豪壮の前には、是等の尖塔は物語めいて見える。

私は雪の凍りつく音が足下から響いて来るのに気がついて、慌ててホテルに帰った。

ホテル、ウエストミンスター・アストリアの食堂には、人気がないにも拘らず既にクリスマスの準備が出来ている。型通り樅の木に綿をかけて、その上には蠟燭に型どった電燈や、色とりどりの豆ランプが適当にあしらわれ、もう灯がとぼされて、張りめぐらした金銀のモールの紐にきらきら映っている。食堂は余り広いので、半分程電気が消されているのが、却って寒寒として見える。ボーイは一樣に黒のお仕着せに緑色の前掛けをして、手持ち無沙汰である。

デザートには、クリスマスの前ぶれでもあるかのように、プディング・ド・ノエルが運ばれた。それはレーズンのはいつたプディングで、その上には強いラム酒をしたたらせ、点火されている。アルコールランプそっくりの青い焰が、立ち昇り、立ち昇りして、たよりなく消えた。私はホークで無造作にくずして口に入れた。表皮がうっすらと暖かくて、中は冷たい。前歯でレーズンが怪しい音をたてた。——丁度、

その瞬間、かすかに花の香がした。私は誰れに言うともなく「木屋の匂」だとささやいた。

「又、例の木屋の香か」

と、もう一人の私が、私をからかった。

「おまえは、巴里のレストランでも、Gros Hambee (アイスクリームの上にラム酒をかけて、火をつけた氷菓) をスプーンであやつりながら、何のかかわりもないのに、突然に木屋の匂がすると、ぶつぶつ呟いていたではないか。」

「では、仕方ない。手ばなしで白状するが、私の瞬間的な旅愁は、いつもきまってる木屋の匂がするんだ。」

そして、その晩私は、ステイムのきかないホテルの一室で、いまだに何処かに感ぜられている異様な匂を、何か貴重なもののようにかかえながら、眠れぬままに、しかし、何んとかしてうまく自分をあやして寝つかせようと骨折った。

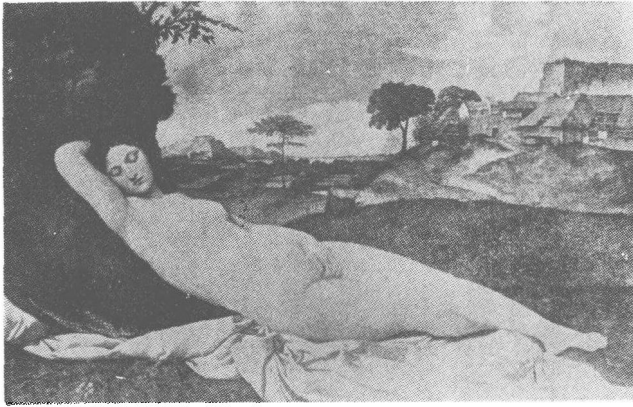
翌朝、目覚めた時は、未だ窓の向うはおぐらく、鳥も啼きださぬ頃であった。もう一度眠りたいと幾度か試みたが、あせればあせるほど頭は冴えてきて寝つかれなかった。と云って、「一」と思いに起き出すのには、寢床のぬくもりが一入恋しいほどの冷えびえとした朝まだきであった。

早い朝食を済まして、ゲルメデ画廊に着いたのは八時、門は相変らずかたく閉ざっていた。

九時開館である。

開幕のベルを待つ客のように、胸がふくらみ、気ばかり急<sup>き</sup>つて落ち着けない。仕方なく、時間つぶしに、手に白い息をかけかけ、昨日と同じ河岸に立った。

河面からは水蒸気が立ち昇り、ぼんやり霞ん

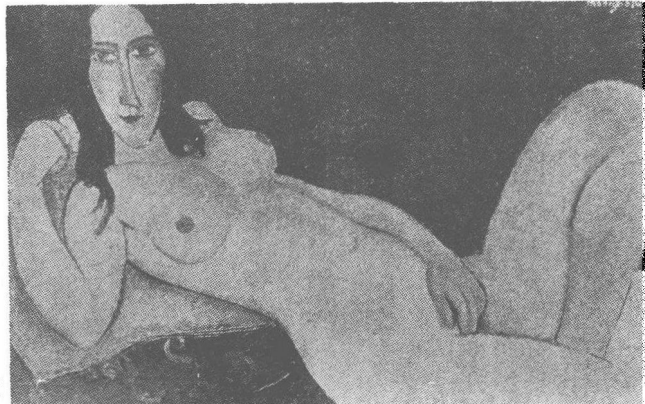


ジョルジオ・デ・キリコ 眠るヴィナス

だ混沌とした風景の底の方では、例の氷の破片が、恐ろしい現実の力で、不断の流をなして過ぎてゆくのである。なおも、見つめていると、氷であるというよりも、つめかけた群羊の背中のように、もくもくとした毛並に見え、どれもこれもなまぬるい手触りが感じられて来る。

腕時計は、やっと九時になったので、美術館にひき返した。例の有名なラファエルの「システナのマドンナ」は、奥の突き当りの正面にかかっている。私は絵の前の長椅子に腰をかけた、ゆっくりと眺めた。此の絵は、日本で写真を見た時も、平板で、つまり構図がきまり切っていて動きが少ない上に、画面に奥行きが足りないと思っていたが、実物もその通りであった。私は旅行者の印象批評はあてにならない事を知っているで、細心に見たが、すぐ底が見えて有名な割につまらぬ。此の絵は聖母や天使達の甘美が一般にうけているのだと思った。私はラファエルの構想の雄大さや、女性的な優美と典雅には一応頷けるし、又整然とした画面処理の理智も分る。然し画格が一体に低調に思われるので余り好きにはなれない。然し私がいつか生長して、ラファエルの絵が全部好きになった時に、記憶のいい読者は、

「おまえは、ラファエルの絵は低調平俗で好きでない。」と、言ったではないか。などと言われると困るから、ここでは余り好き嫌いは云わぬことにしよう。



モジリアニ 裸婦

私は逐次絵を見ながら中央の部屋までもどってきた。其の時部屋の右側寄りに、オークル・ジョンに輝いて、一と際映えた裸婦が目にとまった。勿論ジョルジオ・デ・キリコの「眠るヴィナス」(図示)である。この絵がここにあることをつい度忘<sup>わす</sup>れていたもので、全く思いがけぬところで、思

いもよらぬ人に逢ったような気がした。

ヴィナスは愛の夢を毳毛の下に宿し、ほどよい肉体で、すんなり伸びた脚を無心に投げ出しながら睡りに閉ざれている。詩情と官能とがまつわるように漂っている。然し官能的であると云うよりも、寧ろ上品で石像のように端麗である。整った顔の輪廓。美人ではあるが冷たくなく、近づきやすい女である。

全体の構図はX字型である。体の下側を区切る弓なりの線と、それに応えるかのように野原の穏やかな勾配との交錯、背景に於ける、縦に切っている断崖と、右側中景の家屋との配置。水平線の切り方など、その構図の比例均衡は、真にゆきとどいている。

前面に繰り上げられた白く光った繻子は、指先で撫でれば冷たく滑らかである。寄りかかっている暗赤色の裂の手触りは柔かい天鵝絨である。緑の中に横たわったオークル・ジョンの肉体は、遠景の紺青の山に対照されて、一層輝いている。上部にのぞいた伊太利の空。下部には可憐な花。ジョルジオネの素朴な自然愛と、高潔な人間愛とが渾然と溶け合い、おのずから詩情の世界に導くのである。

私はこの羞恥を含んだ肉体の中に、ジョルジオネ自身の限らない憧憬を見逃せないのである。恐らく彼は、愛する世にも美しい女のイマージュを、理想化して描き、自分自身を慰めたのであろうか。——私達は、裸婦を描く場合、

対象を直写しながらも、常に念頭を去来するのは、自からなるミューズのイマージュである。そして無意識に理想化した女を描くことになるのをよく知っている。

私は「眠るヴィナス」を見た印象の中から、全く必然的と云っていい位、モジリアニの裸婦（図示）を思い出した。其の姿態の類似や、画背を流れている情操や感受性の共通性が直観出来る。ただモジリアニの裸婦は造形に於て近代的に単純化せられ、彼の焦げるような情熱によって、変形され、其の色はルージュに燃え、情熱に身を任せて悔いしないほどの心意が見える。果して、若い頃のモジリアニがフイレントスエやヴェネチアで勉強中に、ジョルジオネに共鳴したか知る由もないのであるが、私は両者の關係を切り離しては考えられぬのである。

私は最初、モジリアニの情操はボッチチエリへの憧憬と考えていたが、この頃では、その官能に於て遙かにジョルジオネに近いと感ずるに至った。

ジョルジオネの描く聖母や女、聖徒や男、ヴィナスや裸婦は、決して苦悶したり、嚴めしい顔や、勿体ぶった様子をしていない。皆普通の人のように快活な顔をし、生の喜びに溢れ、美しく健康である。そこにはデューラーやレンブラントの如く、北方的な神秘的影や、深刻な身振りや、形而上的な、観念的内容や、暗い色彩はない。彼は感覚と直観の豊かさをもつて、

図形と線、色彩と明暗とを適当に安排して、絵画を完全に視覚の世界にまで運んだのである。ジョルジオネの絵は、屢々チシアン初期の絵と混同されたり、或はチシアンの加筆問題が論議せられる。現にこの「眠るヴィナス」は、美術史家モレリ等によつて、真筆なりと云われていても、なお一説には、ジョルジオネが創作を始め、完成したのはチシアンだとも云われている。然し私はジョルジオネの作であると思う。大体に於て、彼の絵だと云われているものには、彼独特の詩情と官能とが夢のように漂っていて、チシアンの絵の惱ましい官能とは遙かに異っている。このことは他日チシアン初期の絵と比較して述べる機会もあらうから、その時に譲ることにする。

さて、私は昼食も忘れて見廻ったので、美術館を出た時は、寒さが相当にこたえた。近くのレストランにとびこんで、茶を飲み、これから近代画廊にクルーベの絵を見に行く予定であったが、最早や時間はなくなつてしまった。明日から美術館は閉鎖されるのが、返すがえすも心残りである。

クリーム色に曇つた雪もよいの空。それでも太陽のありかは判る。真にけだるい暮方である。

夜は雪になった。湿気のない粉雪が、ホテルの向い側の幸福そうな明るい窓に降りかかっているのが、如何にもクリスマス前の夜にふさわ

しい。私が明日、この雪の中を一路ウィーンまで南下しようか、それともブラーグにとまろうか。全く途方にくれている。——冷たい枕である。

ステイムのおちてゆく音が、ひっそりとした廊下の向うから、冴え返って響いて来る。

(昭和七年)

## ペルリンにて

武者小路 実篤

## 映画

日本を立つ時はいろいろの方に大へんお世話になった。センチメンタルない方をすれば数ならぬ身のこというべきところだ。何しろ僕は今度の洋行の時、皆の友情と親切に感謝したことは事実だ。道中無事というべきところだが、船に強くない僕はあまり無事とはいえなかったが、自分としては出来の悪い方ではなかった。しかし船に弱い両横綱の一人になったのは、あまり名譽なことではない。同船の人が冗談にこういった。「証人が沢山いますから、船に強かったようなことをかいても駄目ですよ。」

そこで僕がいった。「僕一人が食堂にかかずに出て、他の人は皆へこたれたようにかいて出すことにしましょう。」

しかし事実、食堂に一番出なかったのは僕で、食堂から一番先に逃げ出したのも僕だった。

しかしそれなら船によったかといわれると、僕は「否」という。実際よわずに来たのである。食事は一度もかかさなかったし、はくなどは勿論、気持のわるいこともなかったが、ねていればよわずにすんだのだ。そのかわりインド洋は完全に室に引こんでいた。

しかしもう一人の横綱は僕より食堂に出た日は二度か、三度多かったが、そのかわりまいると氷嚢を頭にあて、本もよめなければ字をかくことはなお出来なかった。食事もお出来ない時があったらしい。僕は仰向けになつていれば本は読め、字もかけた。だから僕は室に引こんでいても、それほど退屈もせず、また勉強も出来たというわけである。船のなかで僕が一番勉強家だったろうと秘かに思っている。この方は抗議は出まい。

かくて神戸を五月二日に出、六月六日夜おそくマルセーユに無事についたのである。

陸へくればもう僕の世界である。しかし日本をはなれては、水をはなれた河童のようで、元氣ではあるが、どうも少し落ちつきがわるい。西洋人許りいる、それもいいが、言葉がわからないのが一番困る。マルセーユからパリにゆくまで、時々話しかけられたが、少しもわからない。つれが一寸駅で買ひものに行つた時女の人が来て席があいているかどうかを聞いたらしいのだが、わからない。指を三本出して三人いると日本語でいったが、通じたかどうか、女は他

の室に行った。なんでも手で話をするより仕方がない。だまっているのもいやだから言葉は日本語で、手まねで国際語を語るわけだが、中々うまくしゃべれない。八日の夕方パリに着き兄に逢った。すっかりよろこんだのはいうまでもない。兄はパリまで迎えに来てくれた。そして翌日午後一時にパリをたち、兄と一緒に翌朝ベルリンについた。

ベルリンに着いてからいろいろのものを見たが、今日は自分の見た二つのトーキーについて話したいと思う。

ウィリー・フォレスト監督の「アロトリア」で、他はキープラ主演の「日光の内」である。両方とも言葉は十分の九以上わからなかったが、しかし面白かったのは事実だ。見た人は皆、といって、「アロトリア」は三人の人、うち一人は僕だ、が面白かったので、他は見た人六、七人の話を聞いたが、皆面白がっていた。

ここでは、パリでもそうだが、ブロードウェイ・メロディが大人気で、四か月ぶっ通しでやっているそう。僕は日本で半分以上見たので、ここではまだ見ない。

「アロトリア」はグロリア・パラストという映画館でやられて相当の入りで、僕は早稲田の中谷君と行ったのだが、安いところは売り切れで「一つ奮発しますか」と中谷君がいったので、四マークだして一番いいところに入った。隣のマスにも日本人が一人いた。挨拶したいと思っ

たが、その機会がなかった。

「アロトリア」は滑稽ものである。僕はよく知らないが、四人が主役で、四人とも人氣ものらしい。中谷君の話だと、ガビーという女に扮するイエンニー・ユーゴーという女優は近ごろ何かを演じて大へん人氣を得た女優だそう。そしてフィリップという男の役をするアドルフ・ウォルブルニクも中々人氣があるそうだが、あとの二人もそれにまけない人氣者なのだろうと思う。同格にあつかわれている。

それはフィリップの友人でありガビーの夫になるダビデという男を演じるハインリヒ・ルーマンとフィリップの恋人で、なかなかフィリップと結婚しない、しかし最後に結婚するビオラを演じるレナーデ・ミュラーである。

日本でも名を知られている人々かと思う。筋はごたごたしたものである。監督がなかなか利口で、面白く見せている。この監督は日本でも有名なのだらうと思う。僕は人の名を覚えるのが下手だから、監督で名を知っているのは四、五人いるか、いないかで、ウィリー・フォレストの名さえ聞いた名ではあるが、はっきり覚えていないという無学ものだ。

しかし喜劇畑は今度始めてのように中谷君はいつていた。ルビッチのゆき方を真似ているらしいと、これも中谷君の話だ。

しかしルビッチほど才能のひらめきを見せない。もっと全体の力でおしてゆく方と思われる。

る。部分部分もなかなか面白く、会話なども面白いらしく、見物は役者が何かいうと、満場大笑いで館中笑い声が反射して衝突しあうが、僕達はそういう時は残念ながらぼんやりしている。しかしそれでも大声で笑わなければならない時によくぶつかる。しかし言葉のウィットはよくわからない。だからすっかりわかったとはいえないが、しかし中々思い切って、ひつこく、滑稽をくりかえさせる。

筋は簡単である。二人の男と二人の女、それに女の父と男ずきの中年の女、この中年の女にダビデはすかれて閉口している。彼は友達にフィリップが、この夫を知っているの、この女をフィリップに押しつけて、よろこんで逃げだす。そのよるこぶ様を見物はまた夢中によるこぶ。

フィリップというのはジャバで何か仕事をしている世界中を旅行して歩く男で、ビオラと船で知りあうところがある。船がひどくゆれるので、ビオラの親達が、気持が悪くなって食堂から逃げ出す滑稽があるが、これは少し僕には耳が痛(目が痛いといいたところだ)かった。

ウィリー・フォレストの

「アロトリア」

筋をかくということはあまり利口な仕事ではない。つまり目かくしをして大勢が遊んでいる所に、ビオラがダビデをつれてゆき、ガビーが目かくしている所につれてゆく、つかまったものは鬼に接吻をする遊びだ。処がダビデがあ

まり強く接吻するので、ガビーは怒ってダビデの横面をなぐり、目かくしをとると、自分の恋人が、いつのまにか来て、自分につかまっているの、あやまりの接吻のしなおしをやる。そして二人は結婚するのだ。いたずらなダビデは二人の寝台にいたずらをして寝床にとびこむと同時に大きな音がし、ホコリがとぶようにしこみその他にも上から大きな花輪が落ちて来て二人にかぶさるように工夫したりしている。この計画は皆しくじるのだが、それがまた滑稽になる。処が新婚夫婦が来た処へ、フィリップがたずねてくる。そこでフィリップが結婚申し込みをしなかったことを不平に思っている

ダビデは自分がダビデと結婚したということにして、フィリップをいじめる。そしてダビデと仲のいい真似をする。その真似がうますぎて、始めよるこんでその計画に賛成した細君のガビーが嫉妬する。そのくせ友達をだますことだけはつづけてやるので、いろいろ滑稽がおこるのだ。ダビデはゴリアトというすばらしい競争自動車をもっている男だ。

と、だんだんその狂言がもつれて、ガビーがやけ酒のみ、よいつづけるのを、フィリップが汽車にのせてマルセーユにつれてゆく。それを知ってダビデがゴリアトにのって、ビオラとマルセーユまでおいかけてゆく。途中で自動車競走がある処に出くわし、案の定ゴリアトが一等になりダビデは胴上げをされる。そのすきに

ビオラが自動車でマルセーユのハトバにゆきやうとまにあつて、ガビーは船からおり、ビオラはフィリップの手に抱かれる。そしてガビーのお父さんは中年の女と愛しあい、六人三組の夫婦が出来上り、六人が手をつないで大元氣にうたうところで終っている。

筋は馬鹿氣でいるが、中々皆うまくやって氣がきいている。チャップリンの「モダーン・タイムス」ほど感心はしなかったが、しかし中々面白く、愉快なものだった。ルビッチほど氣がきいているものではないが、またちがったいいところがあると思つた。言葉がわかればもつと面白いにちがいないが、愉快な氣持で帰ることが出来た。何処までも快活で、あかるいものだ。

#### キーブラの「日光の内」

キーブラ主演の「日光の内」はキーブラが思う存分うたうのが愉快だった。日本でもキーブラの名は知れ渡つてゐるかと思う。一寸顔は死んだ郡虎彦に似てゐる。髪毛なども、ちぢれていないで、写真では黒いように思えるが本物はまだ見ないから知らないが、日本人に似た人がいふような顔をしてゐる。僕は船で室に引こんでいた時東京の丸善でドイツの役者のことを知りたいと思つて「舞台とフィルムのカレンダー」という、役者の写真が一杯くついているカレンダーがあつたので買つて来たのを何度もくりかえして見、またそこにかいてある簡単な説明

をよんだ。その内にヤン・キーブラの写真も出、説明にこうかいてあるのを読んだ。

「カンマーゼンカーのヤン・キーブラはウィーン国立オペラの一員で舞台とフィルムでの最も愛されてゐる唄い手の一人である。旅興行で彼の名声は全欧州に響いてゐる。」

そこで僕はキーブラの名を覚えドイツに來たら見たい（聞きたいとも）と思つてゐた。それでキーブラの映画があるのを知つた時、是非見たいと思つた。それで兄や嫂にさそわれた時、大いに喜んで一緒に出かけた。

近頃で面白い映画だと、昨日ここに來た客の一人がいつたが、僕も同感だった。ウィリー・フォルストのアロトリアとどっちがいいか、僕ははっきりしたことはいえないが、このキーブラの映画の面白かつたことは事實だ。これはまたホロリとさせる。また人のいい人間が出てくる。快活なものと簡單にはいえない。そこにアロトリアの方が新しいといえる所もあるが、この方が人情味はある。しかし二つの優劣はつける必要はない。両方面白い。しかしこの方は監督の腕を見せたというよりも、キーブラにくりかえしいうが思う存分唄わしたのが働きで、それに二人の女性と、一人の男、貧しい階級の生活と、豪奢な生活の対比を見せたところに働きがあるといへばいえるが、解釈は淺薄ではないが、深いとはいへない。しかし僕はあるところいい氣持で涙を流した。